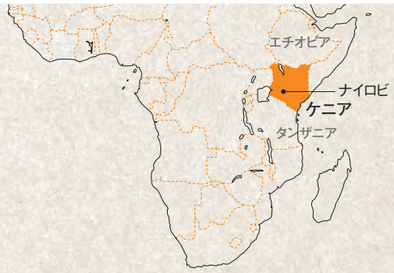

特別レポート

文・写真＝友成 晋也（JICA広報室広報課長）

Qちゃんが”国際協力“と出会った日

ケニアの子どもたちに走る楽しさを伝えたい―。Qちゃんの愛称で知られるシドニーオリンピックの金メダリスト・高橋尚子さんは、日本全国から集めた運動靴を届けるため首都ナイロビを訪問。人々との触れ合いを通じて、国際協力への第一歩を踏み出した。

校庭に出てきて子どもたちと記念撮影。かつて日本でも活躍したワキウリ選手が、キベラスラムを案内してくれた

サファリマラソンのスタート直前。われ先にと、出走者は意欲満々

キベラスラムの小学校を訪問し、少年に話し掛けるQちゃん

マラソンコースは野生動物公園内の敷地からスタート。Qちゃんは参加者一人一人を元気付けながら、最後まで笑顔で走った

スラムの子どもたちに運動靴を届けたい

5月下旬、ケニアの首都ナイロビ。その町中にある、100万人近い人が住む世界最大のスラム街「キベラ」にQちゃんはいた。初めて訪れた開発途上国の厳しい環境を目の当たりにした、シドニーオリンピックの金メダリスト。だがそこでは、日本最高レベルの実績を持つアスリートではなく、目の前の現実をどう受けとめたらいいのか、動揺しながらも懸命に理解をしようとする一人の「女性」だった。

「スマイル・アフリカ・プロジェクト」。Qちゃんの愛称で国民に親しまれている高橋尚子さんが旗を振る、途上国の支援プログラムである。日本国内で使われなくなった運動靴を募り、ケニアの子どもたちに寄贈しようというこの試みは、まさに「走ること」を極めたQちゃんならではの企画。環境雑誌「ソトコト」が主催する「第1回ソトコト・サファリマラソン」の一つの柱となるイベントである。JICAも、運動靴の贈り先として青年海外協力隊の配属先を紹介するなど、協力をすることになった。

滞在2日目、サファリマラソンの現地スタッフとして協力していたソウルオリンピックの銀メダリスト、ダグラス・ワキウリ選手の紹介で、スラム街の一角にある小学校を訪れたQちゃん。「靴を贈れば喜んでもらえると思っていました」。後でそう語った彼女が見たものは、不衛生で貧しい環境の中に生きるまっすぐな笑顔の子どもたちだった。

（上）スタート地点となるケニア野生生物公社で、家畜衛生を教える青年海外協力隊の古賀真由子隊員。活動に思い悩む古賀隊員にQちゃんは「やってきたことは決して無駄にはならないよ」とエールを送った
（下）運動靴の贈呈先の一つ、ナイロビ孤児院の子どもたちの前で。右端は幼児教育を指導する山本恭子隊員

子どもたちと夢を語る

「みなさんの夢は何ですか？」

とある教室をのぞいたQちゃんが、小学校低学年と思われる子どもたちに語り掛ける。

「パイロット！」「先生！」「看護師！」

彼女がどんな人なのか、よく理解していないだろう子どもたちは、日本のテレビ局の取材でカメラが入って、いつもとちょっと違う雰囲気に少し戸惑っている様子。それでも、まっすぐな目で一生懸命答える。子どもたちの質問にも最初は一つ一つ丁寧に答えていたQちゃんだが、そのうち無言になり、最後はただただうなずくだけになっていた。

教室から出てきたQちゃんは、言葉を選ぶようにして言う。「こんな状況の中でも、子どもたちは夢を持っているんですね…」。いつもはじっと相手の目を見て話す彼女だが、このときは珍しく視線の方向が定まらず、目を真っ赤にしながら続けた。

「この子たちはすごいと思いました」

キベラスラムの外に出ようと思えば、いつでも出られる。物理的な障壁は何もない。しかし、そこには目に見えない大きな壁が存在する。スラム街に生まれ育った事実を背負って生きる子どもたち。スラムから外の世界に出て成功した人もいるというが、極めてまれなことのようだ。

生まれながらの環境にハンデを背負って育つ子どもたちが持つ夢は、夢のままで終わるであろう厳しい現実。日本では誰しもに与えられるチャンスを得ることができない世界。Qちゃんは、その圧倒的な厳しい現実の中で生きる子どもたちに、これまでの価値観が大きく変わるのを感じたようだった。

「私は甘かった」

靴を贈ればみんなが喜ぶ。その単純な事実とは裏腹に、日本の常識や価値観では分からない、厳しい環境に生きる子どもたち。彼らにとって靴は、けがや不衛生な環境から身を守ってくれるだけでなく、人生をも変える可能性がある。そう気付いたQちゃんのこの一言は、超一流のアスリートが新たな世界に足を踏み入れた大きな一歩だったのかもしれない。

国際交流が「正面から向き合ってお互いを理解し合うもの」だとすると、国際協力は「同じ方向を見ながら未来に向かって共に進むこと」。この日Qちゃんは、間違いなく”国際協力“のスタートラインに立った。